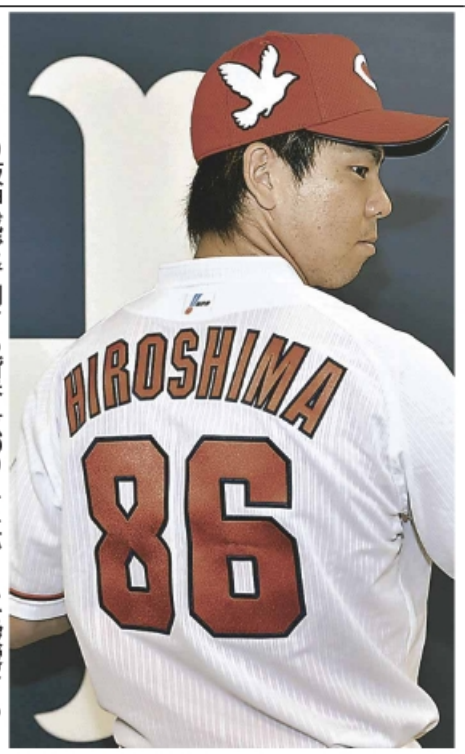
広島と歩む

「8・6」継承 カープの輪

被爆から70年の広島原爆の日を迎える6日、プロ野球の広島東洋カープは選手全員が背番号「86」、片袖に原爆死没者数を記したユニホームを着て、本拠地での阪神戦に臨む。背中には選手名の代わりに「HIROSHIMA」の文字。原爆投下を詳しく知らない子どもが増えるなか、戦後復興とともに歩んできたカープは、球団、選手、ファンを挙げて「8・6」への思いを次代に届ける。



8月6日の阪神戦で着用する背番号86のユニホームを披露する広島の前田健太投手

選手全員 きょう背番号「86」

ファンと平和誓う

カープは原爆投下5年後の1950年に誕生。「カープかたりべの会」によると、焼け野原から復興を目指す街で、球場は河川敷や学校の校庭だった。打球が草むらに入れば〝ジャングルホームラン〟となり、満員時はファウルグラウンドが臨時の客席になった。

だが、資金難にあえぐカープは51年に解散寸前に追い込まれた。当時捕手だった長谷部稔さん(83)＝広島市＝は「給料をまともにもらえなかった」と振り返る。窮状を救ったのが、「カープは誇り」と立ち上がった市民の募金。「あの恩を忘れてはいけない」と長谷部さん。カープにとってもファンが誇りとなる。

地元以外ではあまり知られていないが、広島では59年から2010年まで原爆の日に試合が開催されていない。57年に照明設備を備えた旧広島市民球場が完成し、8月6日は「休場日」と59年に定められた。球場は爆心地に近く、6日は「慰霊の日」とされた。

09年に球場が爆心地から約3キロ離れたマツダスタジアムに移った今、被爆の記憶は年代、地域を問わず風化が進む。5年前に市が実施した調査では、原爆投下の年と日時(午前8時15分)を正確に答えたのは中学生で55％、小学校高学年では33％にとどまった。

選手たちも危機感を抱いている。エースの前田健太投手(27)は入団以来、6日に合わせて原爆慰霊碑を訪問。栗原健太内野手(33)も同じ日に自分の思いをブログにつづっており「広島の課題は原子爆弾が落とされた歴史が風化していくことだ」（13年）と若者たちへメッセージを送る。

カープ女子が増え、全席完売の6日のナイターは鳴り物の応援は自粛。40年来のファンであり、75年の初優勝のパレードで沿道に遺影を持つ女性が多かったことを知る倉本須美子さん(54)＝広島市＝は「カープは家族そのもの、広島のDNA。6日は野球を楽しみながら、平和をかみしめる日にしたい」。

（古川幸太郎）

戦後70年

地元公民館の講演会で戦後間もないカープの逸話を語る長谷部稔さん＝1日午後、広島市西区

(C)西日本新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。